

第3章 資料紹介

第1節 塚原古墳出土遺物

1 塚原古墳出土遺物の概要

塚原古墳は大王町波切1734-2に所在する古墳である。既に墳丘が失われており現地で確認することはできない。

塚原古墳の出土の鏡と玉については米田文孝・酒井泰子（1992）によって報告が行われ、実測図が示されている。また、鏡については高松雅文（2013）も図化、報告している。鏡は画文帯環状乳神獸鏡であり、他に5例の出土例が知られている同型鏡群である。その重要性から、1996（平成8）年に志摩市の有形文化財に指定された。なお、この画文帯環状乳神獸鏡については鉛同位体比分析を実施しており、その結果は第4章第2節に掲載している。

これらの遺物は、1925（大正14）年に開墾に伴い出土したものであり、発見の経緯などについては米田・酒井（1992）に記されている。発見者とその子孫により保管されてきたが、2013（平成25）年3月29日に、今後の保管が難しいことと市に活用してもらいたいことから、所有者から志摩市教育委員会に遺物が寄贈された。遺物中には既に報告されている鏡と玉に加えて、刀と須恵器が含まれていた。刀は存在が知られていたが、須恵器についてはこれまで知られていなかったものである。所有者に確認したところ、他の遺物と一緒に出土したことで間違

いないとのことであった。

塚原古墳の評価は志摩市の古墳時代を考えるうえで極めて重要であることから、須恵器と刀について紹介する。

2 須恵器

1は坏身である。残存する部分にはヘラ削りなどは認められず、全体が回転ナデで調整されている。たちあがりには内斜するが、15mmの長さがある。2は壺の底部である。底部から胴部下部にかけては回転ヘラ削りで調整される。3は甕の体部片である。外面は垂直な向きのタタキ痕が残される。タタキの後に、約30mmの間隔で装飾的な回転ナデが施される。内面の当て具痕は密である。4は提瓶で口縁部を欠損する。吊手は両方欠損するが、円形で下部が小さい形状である。全体が回転ナデで調整されるが、横方向からみた体部の中央には工具による沈線が1条施される。

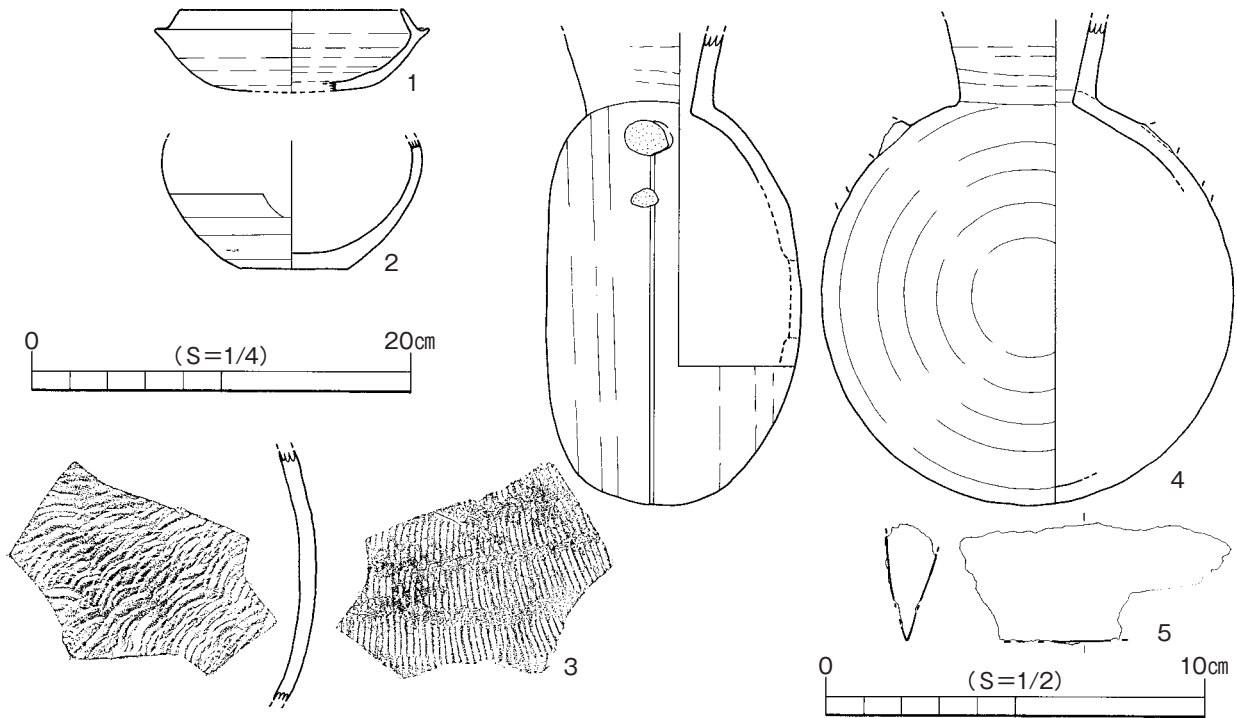
これらの須恵器は概ねTK 43型式期、6世紀後半ごろのものと考えられる。

3 刀

5は刀の刃部片である。刃部は一部残存するが、背部は失われている。残存長は72mm、残存幅は31mm、残存厚さは13mmである。

第10表 塚原古墳出土土器観察表

番号	質	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	その他 (mm)	残存 率(%)	胎土	焼成	色調	調整等
1	須恵器	坏身	116	44	最大径145	15	密	良好	暗灰色	回転ナデ
2	須恵器	壺			底部径57	45	密	良好	灰色	回転ナデ、外面：回転ヘラケズリ
3	須恵器	甕				10	密	良好	灰色	内面：当て具痕、外面：タタキ・回転ナデ、外面に自然釉が付着
4	須恵器	提瓶			体部幅218 体部厚134	100	密	良好	灰色	回転ナデ、外面：工具による沈線



第35図 塚原古墳出土遺物 (1～4 : S=1/4、5 : S=1/2)